

## 方東樹師弟が桐城派形成に果たした役割

浅井邦昭

### はじめに

姚鼐が古文の大家として声望が高まると、その下には、多くの弟子が集まつてきた。彼は後に方苞、劉大櫟とともに「桐城三祖」と称されるが、その古文は、弟子たちによって継承されていった。彼らを核にしなが、文学流派としての桐城派が形成されたのである。

姚門には、方東樹、劉開、管同、梅曾亮、姚瑩、陳用光などの優れた弟子がいた。曾國藩の「歐陽生文集序」（『曾文正公文集』巻一）は、最も早く桐城派を論じた文章である。その中では、姚鼐の教えが師弟関係や交友関係を通して広まったとし、桐城、江西、廣西、湖南における桐城派の系譜を示した。柳春蕊『晚清古文研究 以陳用光、梅曾亮、曾國藩、吳汝綸四大古文圈子爲中心』（百花洲文藝出版社、二〇〇七年）は、江西、廣西、湖南への伝播を、陳用光、梅曾亮、曾國藩に注目して論じ、桐城派が拡大していった過程を考察している。このうち、梅曾亮が当時最も影響力があり、戸部侍郎として京師に二十年あまり滞在するあいだに、多くの知識人と交わりを結んだ。劉聲木『桐城文學淵源考』巻七では、梅曾亮に師事または私淑した者として、三十七名を数えている。弟子たちには進士や挙人も多く、その社会的地位の高さから、京師文壇において重要な地位を占めるようになった者もいる。

桐城への伝播については、馬其昶が「其の郷里に在りては、植之、孟塗、石甫の三先生最も著れ、因りて小方劉姚の目有り（其在郷里、

植之、孟塗、石甫三先生最著、因有小方劉姚之目。）」（『桐城耆舊傳』巻十「許胡左劉張五先生傳第百二」）といい、その中心となったのが、方東樹、劉開、姚瑩であったことを記している。このうち、劉開は早くにこの世を去り、姚瑩は官職に就いて外地に赴く期間が長かったため、実質的には、方東樹が中心となり、多くの桐城出身者が、彼に師事した。曾國藩は、弟子の一人の戴鈞衡を評して、「桐城に在る者は、戴鈞衡存莊有り。植之に事ふること久しく、尤も精力 人より過絶せり。自らを以て其の邑の先正の法を守ると爲せば、之れを後進に禪るに、義として讓る所無きなり（在桐城者、有戴鈞衡存莊。事植之久、尤精力過絶人。自以爲守其邑先正之法、禮之後進、義無所讓也。）」（前出「歐陽生文集序」といい、彼が桐城先賢の法の守護者たることを自任し、それを後進に伝えることに情熱を傾けていた点を紹介している。ただし、こうした思い入れは、戴鈞衡だけでなく、方東樹師弟に共通するものであった。この意識は、彼らの活動が桐城を中心に展開したことから生じたのである。

このように、同じ桐城派として位置づけられたものの、方東樹師弟の意識は、ほかの地域の人々とは異なる側面を持つていた。そこで、本稿では、彼らの活動が桐城派の形成に対してどのように貢献したか論じていく。

## 一、文壇における方東樹師弟の位置づけ

方東樹師弟は桐城を中心にして活動し、京師の梅曾亮らとも交流を持っていた。ただし、京師の人々に対して、必ずしも同派意識を持っていたわけではないようである。そこで、まず方東樹師弟について概観した上で、京師文壇とどのような関係にあったか見ておくことにする。

まず、師である方東樹について見てみる。方東樹、字は植之、桐城の人。嘉慶年間に諸生となり、五十年にわたる客遊を経て、晩年は家居し、八十歳でこの世を去った。その著には、『攷槃集文録』『漢學商兌』『昭味詹言』などがある。彼は科挙に及第できなかったため、陳用光、阮元、姚瑩、鄧廷楨などの招きに応じ、館師や幕客として生計を立てていた。姚瑩は「植之の著述富むと雖も、而れども窮老不遇なれば、言は郷里より出でず（植之著述雖富、而窮老不遇、言不出郷里）」（『東溟文集後集』卷十一「惜抱先生與管異之書跋」として、その影響力が桐城に限定されたことを指摘する。一方で、方東樹は姚鼐に最も長く仕えた弟子であり、五十歳以後は、各地の書院に招かれて学問を講じた。そのため、その学識は評価され、姚門の中では重んじられていた。

『桐城文學淵源考』卷八は、方東樹の弟子と私淑する者として、二十六人を挙げてゐる。まず、年長の蘇惇元が道光十三年（一八三三）に弟子となり、道光二十年（一八四〇）に方東樹が広東から帰ると、方宗誠、文漢光、甘紹盤、戴鈞衡らが入門し、ほかに、方士超、馬三俊、張泰來、鄭福照、陳澹然などの弟子がいる。これらの弟子の中で、本稿で論及する方宗誠、戴鈞衡、蘇惇元、文漢光について、以下に簡単にしておく。

方宗誠は、字が存之、号が柏堂、桐城出身の諸生で、方東樹の従弟である。後に曾國藩に招かれ幕客となり、その推薦により、棗強の知

県になった。その著には、『柏堂集』『柏堂經說』などがある。戴鈞衡は、字が存莊、号が蓉洲、桐城出身で道光十九年（一八三九）の挙人である。劉聲木は、彼を方東樹に仕えた期間が最も長い弟子とする。その著に『味經山館詩文鈔』などがある。蘇惇元は、字が厚子、号が欽齋、桐城出身の監生である。その学問は張履祥に近く、文章は方苞に似るとされた。その著には、『欽齋詩稿』『四禮從宜』などがある。文漢光は、初名を聚奎という。字は斗垣、号は鍾甫、桐城出身の諸生である。彼は詩文に巧みで、その著には、『斗垣初集』などがある。

この略歴からは、弟子のほとんどが桐城出身であることがわかる。このうち、戴鈞衡が唯一の挙人であるのが例外で、多くの弟子が師と同じ生員であった。そのため、彼らが桐城の外で活躍する機会は、それほど恵まれていなかった。それでも、方東樹自身は姚門の高弟として世間から重んじられ、同門の梅曾亮らを通じて、京師文壇とも交流があった。その後、京師との交流は、戴鈞衡が窓口の役割を担うようになっていくのである。

戴鈞衡が京師文壇に名を知られるのは、会試受験のために上京したからである。彼の文章は、桐城と京師のそれぞれで、多くの知識人との交流を経て形成された。彼の文集自序には、その過程が記されている。

問まま藁を録すること有るも、必ず之れを植之先生と同門の厚子、鐘甫、存之の三人なる者とに正して、而る後に存す。歳は庚戌壬子、先後して兩たび都に入る。湘郷の曾侍郎、仁和の邵映垣、山陽の魯通甫、武陵の楊性農、巴陵の吳南屏、復た審正を加へ、選びて若干首を存す。〔『味經山館文鈔』卷首「味經山館文鈔自序」〕

戴鈞衡の文章は、まず桐城で方東樹の指導と蘇惇元、文漢光、方宗

誠の批評を受けていた。その後、道光三十年（一八五〇）の庚戌科と咸豐二年（一八五二）の壬子恩科に受験するため上京すると、曾國藩、邵懿辰、魯一同、楊彝珍、吳敏樹らと交わりを結んだ。いずれも当時の京師文壇における名士であり、梅曾亮に近い人物も含んでいる。彼らから文章の査定を受けたことは、名譽なことであった。それだけでなく、彼が梅曾亮とも交流があったことは、「呈梅伯言郎中」（『味經山館詩鈔』巻五）や「奉懷梅伯言先生」（『味經山館詩鈔』巻六）に見える。文壇において、彼がこのような知遇を得たのは、方東樹の弟子であったことが大きい。この二度の上京を通じて、方東樹師弟の桐城における活動も京師にも伝えられ、「歐陽生文集序」において、桐城派の系譜に彼らの名が記されることになったのである。

戴鈞衡以外にも、方東樹の弟子と京師文壇との交流は見られる。例えば、方宗誠は、梅曾亮の弟子である朱琦と劉傳瑩に対して「朱伯韓先生傳」（『柏堂集續編』巻十一）と「劉芸雲傳」（『柏堂集續編』巻十二）を執筆している。また、『柏堂師友言行記』巻二には、太平天国の乱により、蘇惇元、文漢光、戴鈞衡が死後も埋葬されなかったことを、曾國藩が聞き、彼らのために墓地を買ったことが記されている。これは、幕客であった方宗誠が報告したためであるが、方東樹の弟子たちに対する曾國藩の敬意の表れと言える。このように、方東樹と梅曾亮の交遊から始まり、その後も、桐城と京師文壇との交流は、同じ姚鼐の継承者という縁によって続いたのである。

一方で、すでに述べたように、方東樹師弟は、京師文壇とは異なる性格も有していた。そのひとつが、彼らが桐城三祖の学術における継承者になろうとした点である。方東樹は、四十歳を超えると詩文を以て世に知られることを望まず、義理を研鑽し、經史百家や仏老の説を究めた。その教えは弟子たちにも伝えられ、彼らも学術に力を注ぐようになった。師弟がとりわけ学術に注目したのは、桐城古文の継承を

標榜するほかの人々と、自分たちを差別化しようとしたからである。当時の状況について、方宗誠は次のように言う。

桐城の古文 天下に名あれば、則ち方望溪、劉海峰、姚惜抱の三先生を以て、實に海内文章の宗と爲す。學を承くるの士、濡染すること日に深ければ、往往にして文辭を以て自らを見さんとするを喜ぶ。曩者、自ら量を揣らず、予の友の文鍾甫、戴存莊、馬命之と經學行義を以て相い砥勵し、而して又た餘力を以て辭章に従事す。以爲らく文なる者は道の末にして、而も要するに亦た學の中に有る所の事なりと<sup>二</sup>。（『柏堂集補存』巻二「徐椒岑文集序」）

ここでは、文章を道の末として、学術に包摂すべきものとして、ここにいう「承學之士」とは、京師の人々を指していると思われる。その中心となる梅曾亮は、詩文に秀でてはいたものの、ここでいう經學行義においてきわだった成果を収めていない。この傾向は弟子たちも共通しており、彼らは主に詩文の応酬を通じて、桐城古文の継承者として同人意識を高めていた。一方、方東樹の『漢學商兌』は、方宗誠に「蓋し先生の書行なはれてより漢學家の程朱を詆誣するの風始めて漸く熄まん（蓋自先生書行而漢學家詆誣程朱之風始漸熄矣）」（『柏堂集前編』巻七「儀衛先生行狀」といわれるように、その著作が流行を一変させたという、師弟共通の自負がある。そのため、自分たちを桐城三祖の学術における継承者と位置づけることで、京師における桐城古文の流行とは、一線を画そうとしたのである。

本章では、方東樹師弟と京師文壇との交流を見た上で、両者の差異について見てきた。「歐陽生文集序」は、方東樹らも桐城派の系譜に位置づけているが、それは京師からの評価であり、彼ら自身はほかの継承者とは違うという自負があった。この違いの根底にあるのが、方

東樹らが桐城出身であるという特殊性である。桐城という土地に特別な思い入れをすることで、彼らは京師文壇と異なるかたちで桐城三祖の継承を描き出そうとした。そこで、次章以降では、方東樹師弟が桐城三祖をどう位置づけ、出身地に対する思い入れを、どう活動に結びつけていたか考察していく。

## 二、桐城人文における桐城三祖

方東樹師弟は、桐城の地域文化に言及する際に、たびたび「桐城人文」ということばを用いている。郷土の地域文化を重視することは、桐城に限らず、地方知識人に広く見られる現象である。ただし、桐城の場合は、桐城三祖を生み出したという歴史背景がある。そのため、彼らは桐城三祖を桐城人文の代表として位置づけていた。そこで、本章では、彼らが主張した桐城人文が、どのようなものであったか見ていくことにする。

方東樹は姚門の一員であることを強く意識していたが、師承とは別に、家学を重んじる姿勢も見せている。姚瑩への書簡に「憶ゆるに十一歳より、文を爲るを學ぶ。時に先子 海峰先生暨惜翁を承け、古文詞の學を倡ふれば、僕耳にして之れに熟す。盡くは識ること能はざると雖も、然れども亦た此の流に與せりと（憶自十一歳、學爲文。時先子承海峰先生暨惜翁、倡古文詞之學、僕耳而熟之。雖不能盡識、然亦與於此流矣）。」（『攷槃集文録』卷六「答姚石甫書」）とあるように、父の方績から家学として劉大櫨と姚鼐の古文を学んだ。方東樹の家は、桐城三祖と世交があるため、その継承を使命とするようになったのである。

このように、方東樹にとって、桐城三祖の継承は、家学からの要請でもあった。そのため、当時の流行に対しては、「方姚の名四方皆な

知るを攷ふるに及んで、其の門人 業を傳ふるもの多しと雖も、然れども一二の高弟の親炙して眞に知るものを除いての外は、皆な徒らに其の聲に附せども其の序を繼ぐことを克くせず（及攷方姚之名四方皆知、其門人傳業雖多、然除一二高弟親炙眞知外、皆徒附其聲而不克繼其序）。」（『攷槃集文録』卷四「劉梯堂詩集序」）といひ、当時の流行に異議を唱えている。彼は、梅曾亮ら高弟に対しては、十分な敬意を払っていた。ただし、その敬意は、桐城古文の流行に追隨するほかの弟子には及ばなかった。ここからは、彼が当時の桐城古文の隆盛を必ずしも喜ばしいものと考えておらず、その流行を批判的に捉えていたことがわかるのである。

こうした桐城古文の流行への批判として、方東樹は桐城人文という枠組みを提示した。彼の「馬氏詩鈔序」は、桐城人文について論じた文章である。桐城人文の伝統は、唐宋に始まり、その後は望族の興隆にともない、それぞれの家で家法として伝えられた。その結果、桐城人文は江北の冠として、比類なき隆盛を誇ったとする。その上で、桐城三祖以外の作者を顕彰することは不要とする主張に対し、次のように反論している。

吾れ以爲らく非なりと。夫れ天文を觀る者、日月の明を觀て恒星を蔑むこと能はず、地理を察する者、泰華の高きを仰ぎて廬霍を劘ること能はず。且つ方劉姚も自ら作者の録を纂むれば、而れば人の子孫爲るもの各おの其の先祖の美を顯すこと、其の義固より並行して、而も偏へに廢せず。余故に馬君の詩鈔に因りて、爲めに一邑源流の主旨を著し、來者をして攷ふる所を有らしめ、而して又た以て天下事理の方無くして一道を以て之れを隘とすることの容さざるを明らかにするなり。（『攷槃集文録』卷四「馬氏詩鈔序」）

ここでは、桐城三祖が傑出していることは認めながらも、そのほかの作者を顕彰することも重要であるとする。彼の中では両者は並存しているが、それは、桐城人文を総体として評価し、その中に桐城三祖を位置づけようとしたからである。桐城人文という地域性を強調すること、桐城三祖についても独自の評価を試みようとしたのである。

桐城人文を総体として評価する姿勢は、弟子たちにも受け継がれた。その姿勢は、桐城に関する文献整理として、現実化することになった。文献整理による桐城人文の継承について、方宗誠は次のように記している。

桐城の山川、雄傑にして盤廻すれば、深厚たること江の南北に甲たり。磅礴として鬱積すること既に久しければ、遂に發して人文と爲る。唐宋より已に然り。唐の曹松 全唐詩録に著され、宋の李公麟 宋史文苑傳に見ゆ。明に迨びて國朝に至り、人文尤も極盛に推る。康熙の間、何芥須輯めて龍眠古文有り、潘蜀藻輯めて龍眠風雅有り、皆な一邑の詩文を纂集するなり。道光の間、徐樗亭、戴存莊、復た廣續して以て之れを廣めて桐舊集と曰ひ、桐城文録と曰ふ。而も世家巨族、又た多く哀めて一族の著述を録すれば、以て文献を存す。方氏の方氏詩輯有り、馬氏の馬氏詩鈔有るが如し。烏呼、盛んなるかな。是れ皆な一邑鍾毓の秀にして、徒だ一族の光顯爲るのみに非ざるなり<sup>四</sup>。〔『柏堂集餘編』卷三「周氏清芬集敘」〕

方宗誠によれば、桐城人文の隆盛は、唐宋以来の伝統から生み出されたものであり、その成果は、詩文総集や家集の編纂として結実している。こうした認識に基づき、師弟は文献整理を通して、桐城人文を世間に喧伝しようとした。例えば、桐城の詩文総集として、戴鈞衡は

文漢光とともに『古桐郷詩選』を編み、方宗誠と『桐城文録』を編んでいる。また、整理の対象には、桐城三祖に関する文献も含んでいる。方苞については、その文集を蘇惇元と戴鈞衡が『望溪先生文集』『集外文』『外文補遺』として重訂し、あわせて『方望溪先生年譜』を編んだ。姚鼐についても、鄭福照が『姚惜抱先生年譜』を編んでいる。方東樹師弟は、これに並行してそのほかの桐城作者に対する家集や別集も刊行しており、彼らにとつて、文献整理は、桐城人文を称揚するために、重要な活動と位置づけられていたことがわかる。

こうした文献整理の代表が、戴鈞衡と方宗誠によって編まれた『桐城文録』である。方宗誠の「桐城文録叙」（『柏堂集次編』卷一）によれば、『桐城文録』は、七十六卷、桐城作者八十三人の文章を収録していた。編纂の目的について、序では、桐城三祖を別にして、名家とすべき者が数人おり、そのほかについても、学術文章を論じ、忠孝を記した作品は、見聞を広め、故実として遺すべきだとしている。さらに、「周氏清芬集叙」と同じく、桐城人文の歴史を記し、方東樹の「馬氏詩鈔序」と同じく、桐城三祖とそのほかの桐城作者の関係を、天文と地理の比喩を用いて論じている。その点では、「桐城文録叙」は桐城人文に関する師弟の主張を集大成したものとと言える。

この序からは、『桐城文録』が師の主張を受け継ぎ、桐城人文を称揚することを目的としたことがうかがわれる。「歐陽生文集序」では、桐城派が地域を越えて伝播するのを認めていた。その系譜が、師承という縦の継承を基本としていたからである。ところが、ここでは縦の継承ではなく、桐城人文という枠組みの中で、桐城三祖を評価している。これにより、その古文が師承によるのではなく、地域文化の伝統から生まれたことを明らかにし、ほかの地域では、継承が難しいことを示そうとしたのである。

こうした姿勢を反映して、「桐城文録叙」は、桐城三祖における師

承を、限定的に評価している。方宗誠は、「我が朝の文家を論ずる者、多く望溪、海峰、惜抱の三先生を推すも、而れども三先生實に各おの其の能を極めて、相い沿襲せず（我朝論文家者、多推望溪、海峰、惜抱三先生、而三先生實各極其能、不相沿襲。）」（前出「桐城文録跋」といい、三人の文章が継承されたものでないと主張する。さらに、三人の特徴として、方苞は「義法」を宗とし、道義人倫に関わる作品でなければ、軽々しく作らなかつた。劉大櫚は「品藻音節」を宗とし、文章の法を方苞から受けたが、それを変化させることで、自らの作風を完成させた。姚鼐については、「神韻」を宗とし、法を劉大櫚と姚範から受けたが、作品には独自の深い理解があるとす。ここでは、桐城三祖の「義法」「品藻音節」「神韻」と、それぞれ重視するものが異なり、また師から継承した部分を評価するのではなく、文章を独自に変化させた点に注目している。この序では、桐城三祖の同一性ではなく、それぞれの独自性を強調するのである。このように、「桐城文録叙」は、三人の多様性を認めながら、桐城人文という枠組みの中で評価しようとしている。その背後には、彼らの文章を桐城古文として同一視し、その表面だけを継承しようとする人々に対する批判が潜んでいると考えられるのである。

この序によれば、桐城人文の伝統は、姚鼐で終わるのではなく、方東樹師弟へと継承されていく。「桐城文録跋」では、姚鼐の後に、方東樹と姚瑩の巻を特に立て、それに方東樹の弟子の巻を附している。

桐城の文、植之先生より後、學者多く務めて窮理の學を爲め、石甫先生より後、學者多く務めて經濟の學を爲む。植之先生の友の許玉峰、門人の蘇厚子、後進の張瑞階、方魯生、馬命之、皆な理學を宗主する者なり。今ま附して許玉峰、蘇厚子の文一卷、張瑞階、方魯生、馬命之の文一卷を録す。

植之先生の門人の中、戴存莊の才氣を以てを大と爲す。其の始め才華を尚び、繼いで理を論じ事を論ずることを好めば、實用に關はるの文有り。文末だ精らかならざると雖も而れども實得有り。惜むらくは年四十にして卒せり。余 桐城文録を編むに、義例多く存莊と手訂す。今ま存莊の文二巻を録して終ふ<sup>五</sup>。（前出「桐城文録跋」）

方宗誠は、方東樹と姚瑩を経て、自分たちへとつながる系譜を示した。方東樹の窮理の學を受け継ぐのが、許鼎、蘇惇元、張泰來、方士超、馬三俊であり、戴鈞衡は窮理の學と經濟の事功を論じ、實用に關わる文を執筆している。弟子たちが受け継いだのは、桐城三祖の文章そのものでなく、方東樹や姚瑩の継承を経て、変化して深化したものである。ここからは、自分たちが桐城人文を継承し、さらに發展させる使命を自覚していたことを読み取ることができる。

方東樹師弟が主張した桐城人文は、桐城における共通認識だったようである。例えば、姚瑩は『康輶紀行』の中で、桐城の學術文章について論じている。彼は、まず桐城の經學、理學、博學、古文、詩學における代表を列挙し、姚範と姚鼐が各分野の伝統を綜合したとする。それに続いて「今ま方植之東樹、學問文章、體博く思ひ精らかなれば、其れ亦た編修と惜抱先生との後塵なるものか（今方植之東樹、學問文章、體博思精、其亦編修與惜抱先生之後塵矣乎）」（『康輶紀行』卷八）といい、方東樹を桐城人文の継承者として認めている。このように、桐城人文は、方東樹らが主張するだけでなく、彼らの周辺では、共有されていたのである。

一方で、京師文壇では、この枠組みはなかなか理解されなかつた。「歐陽生文集序」では、桐城への伝播として、方東樹と戴鈞衡の名を挙げるのみで、系譜に広がりがなく、梅曾亮師弟に比すれば、傍流の

扱いである。また、曾國藩は、桐城先賢の法の守護者となろうとする戴鈞衡の意気込みを記すが、その地域文化の伝統を継承しようとする姿勢を奇異に感じたからである。これは、桐城人文という枠組みが、京師の人々に理解されなかった状況を反映しているのである。

本章では、方東樹師弟による桐城人文の継承について論じた。これまでも、研究者によって、桐城の地域文化が桐城派に与えた影響が考察されてきた<sup>六</sup>。こうした視点は、方東樹らがすでに提出したものである。ただし、彼らが桐城人文を取り上げたのは、自分たちを桐城三祖の継承者として位置づけるためであった。同時に、当時の桐城古文の流行に対する批判が、このようなかたちで表れたと考えられるのである。

### 三、戴名世の再評価

方東樹師弟の文献整理は、後世の桐城派研究に大きな成果をもたらすことになった。それが戴名世の再評価である。戴名世は桐城の出身で、方苞の友人である。その古文は高く評価されたが、康熙五十年（二七一）の文字の獄『南山集』案が発生すると、彼は死刑に処せられた。その後は「宋潜虚」などの仮名を用いることで、人々は禁忌に触れないようにしていたのである。

一方、現在では、彼を桐城派の先駆とみなし、研究者によっては、「桐城四祖」として、桐城三祖に戴名世を加えている。近代以降における戴名世の再評価については、佐藤一郎「桐城三祖およびその学統における戴名世」（『中国文学の伝統と再生 清朝初期から文学革命まで』（研文出版、二〇〇三年）所収）で紹介しているが、その動きは、すでに清から始まっていた。フランスのピエール・デュラン（戴廷杰）『戴名世年譜』（中華書局、二〇〇四年）によれば、乾隆年間までは、戴名世の著作は、各地の巡撫によってたびたび報告され、

禁書として扱われた。こうした報告は、嘉慶年間には見られなくなり、道光年間になると、その著作がふたたび刊行されはじめた<sup>七</sup>。こうした動きの中で、方東樹師弟は、再評価の中心的役割を果たすようになった。

戴名世への言及は、方東樹や姚瑩の文章にすでに見られる<sup>八</sup>。禁令の下でも、桐城では、その名をひそかに伝えてきたようである。方宗誠「記張臯文著柯文後」によれば、晩年になると、方東樹は戴名世を桐城三祖に匹敵する作者として評価するようになった。彼は、その古文を左丘明、莊子、司馬遷、韓愈、歐陽修の精神を得ていると評しているが、一方で「惟だ時に憤り俗を疾むの作、蘊蓄淵懿たることは三家に遜り、而も其の紀事の文は、固より復乎として尚ぶべからず（惟憤時疾俗之作、蘊蓄淵懿遜三家、而其紀事之文、固復乎不可尚矣。）」（『柏堂集前編』卷三「記張臯文著柯文後」）として、時勢への不満が噴出した作品は、その厚みと深みが桐城三祖に及ばないとする。ただし、この書後では、戴名世を清の名家十人に含めており、単なる地方作家の一人とは見なしていない。方東樹のこのような評価は、弟子たちにも引き継がれていったのである。

弟子たちによる再評価としては、まず戴名世の作品が『桐城文録』に収録されたことが挙げられる。この序については、江小角、朱楊「方宗誠の文學教育與近代桐城派傳播」（『安徽大學學報（哲學社會科學版）』二〇一三年第五期（安徽大學、二〇一三年）所収）でも言及されているが、方宗誠はほぼ「記張臯文著柯文後」の評価を引き継いでいる。

望溪同時の友戴潛虚先生、文頗る司馬子長、歐陽永叔の生氣逸韻を得、其の空靈超妙たること往往にして人の意表に出づ。惟だ蘊蓄淵懿、沈深高潔たること三家に遜りて、而も時に憤り俗を疾む

の作、尤も多く用ふるは、此れ古への作者に逮ばず。先生又た文字を以て禍ひを得、未だ深く力を用ふること望溪の如くなること能はざりて、而も名も亦た遂に湮没せり。今ま附して潜虚の文六卷を録す<sup>九</sup>。（前出「桐城文録叙」）

この序では、彼が司馬遷や歐陽修の気韻を受け継ぎ、その靈妙さが人々の想像を超えることがあると評価する。この表現は、方宗誠独自の見解と言うより、師の教えを改めて表明したものと見える。ただし、方東樹の場合、桐城三祖に及ばないのを一部の作品に限定したが、ここでは作品全般への評価としている点が異なる。このように、方宗誠は師の評価を受け継いで、『桐城文録』に収録することで、名世を桐城人文の一員と認めたのである。

再評価は、戴名世の古文だけでなく、八股文にも及んだ。蘇惇元はその八股文を方苞兄弟と並べ、「本朝の時文大家、方百川、方望溪、戴潜虚諸公の如きは、少き時皆な先づ古文を作り、而る後に格を降ろして時文を爲る（本朝時文大家、如方百川、方望溪、戴潜虚諸公、少時皆先作古文、而後降格爲時文。）」（『遜敏録』巻四）という。また、戴鈞衡は方舟、寶光鼐、劉大櫨と並べ、「時文有りてより以來、震川を推して極と爲せば、則ち我が朝の百川、潜虚、東臯、海峰は、震川の外に、又た別に至詣に臻る（自有時文以來、推震川爲極、則我朝百川、潜虚、東臯、海峰、於震川外、又別臻至詣。）」（『馬徵君遺集』巻末「養心齋經義跋」）とする。このように、方東樹の弟子たちは、戴名世を古文だけでなく、さまざまな分野において評価しようとしている。その禁忌が緩んだことで、彼らは戴名世を桐城人文の新たな代表の一人として、世間に知らしめようとしたのである。

このように再評価が進むと、ついには、弟子の中に戴名世を桐城第一と見なす者も出てきた。陳澹然は、「桐城の文、實に戴氏を首と

す。以らく其の空氣の能く萬有を包羅すること、方姚の但だ能く簡潔なるのみにして、包羅すること能はざるの若くに非ざるなりと（桐城之文、實首戴氏。以其空氣能包羅萬有、非若方姚但能簡潔、不能包羅也。）」（『晦堂書録』巻一「刪訂戴南山集八卷」）といい、その氣は森羅万象を包み込むことができる。それは簡潔を貴ぶ方苞や姚鼐では難しいことであった。このように、戴名世の優位を論じることが可能になったのは、方苞や姚鼐を別格とせず、同じように桐城人文の中に位置づけたからだと言えるのである。

彼らがおこなった再評価活動のうち、特筆すべきが、戴鈞衡による『潜虚先生文集』の刊行である。これには『南山先生年譜』が附されており、現在の戴名世研究の基礎文献となっている。文集の目録には、無名の序があり、その中では、戴名世の文章を次のように評価する。

國朝の作者間ま出づるも、海内翕然として推して正宗と爲すは、吾が郷の望溪方氏に如くは莫し。而れども方氏生平極めて嘆服する所の者は則ち惟だ先生のみ。先生望溪と生まるるに同里と爲り、又た少きより志意相い得て、老に迫びても衰へず。其の學力の淺深、文章の得失、之れを知ること深く之れを信すること篤き者は、望溪に如くは莫し。望溪之れを推せば、學ぶ者其れ復た何をか説かんや<sup>十</sup>。（『潜虚先生文集』巻首「潜虚先生文集目錄」）

この序は、刊行者である戴鈞衡のものとされている。ここでは、方苞が天下の尊崇を集めていることに触れた上で、戴名世がその友人であったことを取り上げる。彼の文章の価値は、方苞のみが知っているもので、方苞の古文を学ぶ者は、その文章もあわせて尊重すべきであると主張した。ここでは、当時の桐城古文に対する尊崇を利用し、方苞



を引き合いに出すことで、彼を方苞の地位まで高めようとする。このように、戴鈞衡は、彼を方苞に匹敵する桐城人文の代表と見なしたのである。

戴鈞衡は文集の刊行だけでなく、京師における戴名世の認知についても、重要な役割を果たした。京師文壇に属す孫鼎臣は、文集に序文を執筆しているが、方苞と戴名世を、韓愈と李翱、歐陽修と曾鞏の師弟関係に比している。それに続いて、作者の不遇について論じ、「集凡そ十卷、予に貽る者は戴存莊孝廉なり。孝廉は桐城の人なれば、其の郷の先生に私淑する者なり。既に業を卒へ乃ち序して之れを藏し、以て後の言を知る者を俟たん（集凡十卷、貽予者戴存莊孝廉。孝廉桐城人、私淑其郷先生者也。既卒業乃序而藏之、以俟後之知言者）。『蒼良初集』卷十四「潜虚集序」として、序を執筆した経緯を記し、戴鈞衡を桐城作者に私淑する者と紹介している。この序では、方苞と戴名世を韓愈らの師弟関係になぞらえており、優れた作者と認めているものの、あくまで方苞が主で戴名世が従である。つまり、戴名世を桐城三祖に匹敵する作者とは捉えておらず、地方作家の一人として評価している。このように、京師では桐城三祖を別格としているため、戴名世のような、そのほかの桐城作者に対する関心は低かったことがわかる。

本章では、戴名世の再評価について見てきた。方東樹らは、同郷人として、桐城三祖だけでなく、多くの桐城作者を顕彰しようとした。これが、戴名世を再評価することにつながったのである。現在、彼を桐城派の先駆や「桐城四祖」の一人と見なすのは、方東樹師弟の再評価を踏まえたものと言える。ただし、彼らの再評価活動は、当時は桐城内部にとどまり、京師では十分に理解されなかった。ここにも、同じように桐城古文を継承しながら、桐城と京師における意識の差が見られるのである。

#### 四、「崇祀郷賢」を通じた桐城派への貢献

これまで見てきたように、方東樹師弟は、桐城人文という枠組みを提示し、その地域性を強調していた。彼らの活動の場はあくまでも桐城であるため、桐城三祖の地位向上に関する政治活動も、桐城で展開している。そこで、本章では、彼らが関わった桐城三祖の「崇祀郷賢」について考えていく。

「崇祀郷賢」は、桐城に限らず、明清両朝を通じて、地域社会で広くおこなわれた。魏峰「従先賢祠到郷賢祠 従先賢祭祀看宋明地方認同」〔浙江社會科學〕二〇〇八年九期（浙江省社會科學界聯合會、二〇〇八年）所収）によれば、明になると厳格な学校制度と戸籍制度が構築されたため、知識人の地域への帰属意識が強まったとする。それが地方祭祀制度にも変化をもたらし、郷賢祠および名宦祠が誕生したのである。魏氏は、郷賢とする条件として、対象者が長く県学に学び、その道德文章が、土地の生員と郷老から一致して認可されることを挙げている。このように、「崇祀郷賢」には地方の知識人社会の承認が必要のため、方東樹師弟も関与することが可能であった。方苞や姚鼐の地位向上に関与することで、自分たちが桐城人文の継承者として認知され、ひいては桐城の知識人社会における発言力を強化しようとしたのである。

まず、方東樹の「崇祀郷賢」への関与を見てみる。姚鼐を郷賢とするため、彼は「爲姪傳先生請祀郷賢公啓」を執筆している。その中には、その学行が優れていることを強調した上で、次のように請願している。

郷評既に協はするに、儒林の冠冕として、祀典に合ふこと有りて、禮制に愆ること無しと。此れが爲めに公籲し、郷賢に題請して、以て學行を彰らかにせんことを申詳す。庶幾はくば仰ぎて崇

祀をかたじけなくし、芳烈をして無窮に奮ひ、渥あつく褒嘉ほけを荷にはしめば、自ら俎豆して奔世に榮えん。相い應じて其の事冊に備へ、郷族の甘結を並べれば、呈送査核して、施行することを詳請せん<sup>十一</sup>。『攷槃集文録』卷十二「爲姫傳先生請祀鄉賢公啓」

方東樹は「郷評」に言及し、その活動が、桐城の知識人たちから支持を得ているとしている。「崇祀鄉賢」は、その土地の知識人社会の輿論に左右されるため、彼らへ根回しする必要があったのである。また、郷賢に列せられるということは、その学行が評価され、桐城知識人社会における地位が高まることを意味する。姚鼐が郷賢となることは、ひいては、その弟子の発言力も高まることになる。だからこそ、姚鼐の地位向上は、方東樹だけでなく、姚門に共通する願いでもあったのである。

実際に、姚鼐の「崇祀鄉賢」は、姚門の弟子たちの協力があった。鄭福照『姚惜抱先生年譜』によれば、道光十年（一八三〇）に安徽巡撫により、姚鼐を郷賢祠に祀ることが申請されている。この時の巡撫は姚門の鄧廷楨であり、方東樹とも旧知の間柄である。姚鼐の『姚氏先德傳』卷四は、道光十年のうちに姚鼐の郷賢が認められたと記すが、王達敏『姚鼐與乾嘉學派』（學苑出版社、二〇〇七年）第八章によれば、姚範と姚鼐の郷賢は、道光十二年（一八三二）に認められたとする。王氏は、この活動に関する文書が、姚鼐によってまとめられ、『桐城姚葦塢惜抱兩先生崇祀鄉賢録』として刊行されたという。このように、姚鼐の場合は、鄧廷楨や姚鼐などの姚門の有力者が関与するため、速やかに郷賢として認められた。その結果として、姚門の桐城における発言力の強化にもつながったと考えられる。姚鼐の「崇祀鄉賢」は、方東樹の弟子たちが入門する前のことであったが、おそらくこの時の経験を踏まえて、彼らは、後に「崇祀鄉賢」への関

与を、さらに深めていくのである。

彼らがめざしたのは、方苞の「崇祀鄉賢」であった。方宗誠によれば、蘇惇元は方苞の文集を重訂しただけでなく、「里人を率ゐて、大吏に言ひて、奏して郷賢祠に從祀せんことを請ふ（率里人、言於大吏、奏請從祀於郷賢祠）」（『遜敏録』卷首「蘇厚子先生傳」という活動をしており、その郷賢をめざしていた。また、戴鈞衡は桐郷書院を運営するために、「桐郷書院四義」を執筆したが、そのひとつが「祀郷賢」であった。その中では、先賢を祀ることの必要性を論じ、桐城では、明の正徳年間以降で功績が顕著な者として、何唐、方學漸、方苞、姚鼐の名を挙げる。方苞と姚鼐の名を挙げた理由として、彼は次のように言う。

望溪の學行、篤實純粹にして、惜抱生まるるに乾嘉に當り、海内の攷證ま家方に盛んにして、出づるもの奴とし入るもの主として、程を漂ひるがし朱を焚き、悖もとりて道義を害ふ。先生獨り卓識ありて惑ふ所と爲らず、折衷して論斷し、一に和平に歸す。數先生は、名は當時に在り、功は突襖のこに垂せば、是れ急ぎ宜しく奉りて以て崇祀すべきなり<sup>十二</sup>。（『味經山館文鈔』卷一「桐郷書院四議」）

ここでは郷賢とすべき理由として、古文については触れず、二人の学行を取り上げている。先に見たように、方東樹らは、桐城三祖の学術における継承者であることを自任していた。そのため、特に学行を理由としたと考えられる。姚鼐については、漢学への攻撃を取り上げているが、この功績は、方東樹の『漢學商兌』の先駆とすべきものである。あえてこれに注目することで、戴鈞衡は自分たちの地位向上にもつなげようとしたのである。

この方苞の「崇祀鄉賢」に関しては、知識人社会の反発も招いたよ

うである。先に見たように、郷賢として祀られるには、郷土への功績以外に、県学で長期間学ぶ必要があった。つまり、対象者は、知識人社会の一員として認められなければならない。方苞の場合は、この条件を満たしていないため、方東樹の弟子たちは苦勞したようである。そのことは、方宗誠の「復何小宋方伯」から、うかがい知ることができさる。

宗誠遍く故籍を検するに、實に稽ふるべきこと無く、惟だ國家舊制を考ふるに、郷賢を祀らんことと名宦を祀らんことを請ふは同じからず。名宦必ず政蹟を臚擧するは、實に功德を民に有れども、郷賢は則ち凡そ德行學問有りて、一郷の表率と爲すに足る者は、皆な郷に祀らんことを請ふべし。定めて功德利益を郷に有りて而る後に祀らんことを請ふべきを必ひざるなり。桐城の方百川先生名は舟の如きは、籍を上元の廩貢生に寄せ、年三十七にして卒す。寒儒何ぞ功德を郷にあらん。惟だ文行高邁なるを以て、天下宗仰すれば、遂に没後に、入りて郷賢祠に祀らる。其の弟望溪先生名は苞、少くして桐城の諸生と爲るも、後に京師に官たりて、老いては金陵に居り、未だ曾て桐城に一日も居らざれば、其の功德無きこと、桐に在れば知るべし。亦た惟だ經學文章を以て一世に師法たりて、官に居ること又た名臣爲れば、遂に咸豐元年に、桐城の郷賢祠に祀らんことを請ふ。其の他、宿松の朱字綠太史名は書、桐城の姚臺塢太史名は範、姚惜抱郎中名は鼐の如きは、皆な功德を郷に有るに非ずして、止だ博學高文品行端潔を以て後生の典型と爲る。<sup>130</sup>（『柏堂集外編』卷七「復何小宋方伯」）

これによれば、方苞の場合は、咸豐元年（一八五一）に申請され、姚鼐から二十年ほど遅れた。遅れた理由は、彼が生前に桐城に貢献し

たことがなく、郷土に功績がないからである。そのため、その郷賢をめぐすことは、知識人社会から合意を得られにくい状況だった。だからこそ、方宗誠は書簡において、郷賢の条件を論じているのである。ここでは、旧来の条件を変更し、学行文章が顕著であるだけでよいとしている。変更にもない、「崇祀郷賢」の対象者は増えることになった。その結果として、方苞の「崇祀郷賢」が実現したと考えられるのである。方宗誠らにとつては、桐城三祖を桐城の郷賢とすること、外には桐城の名声を高めることができ、内には自分たちに対する認知が進むことになる。このように、方東樹師弟にとつては、「崇祀郷賢」は単なる地方祭祀ではなく、自らの影響力を高めることのできる政治的活動だったのである。

本章では、「崇祀郷賢」に関する方東樹師弟の活動を見てきた。社会的地位が低い知識人は、その土地においても限定的な影響力しか発揮できない。方苞や姚鼐を郷賢とすることで、自分たちの地位向上をねらったと考えられる。ただし、劉大櫨については、『桐城耆舊傳』でも、郷賢に祀られたという記述がなく、方東樹の周辺にも、その郷賢に関する言及が見られない。その理由としては、その学行に注目すべきものがないこと、桐城県でも樅陽の出身であること、方氏や姚氏のような望族の出身でなかったことが考えられる。劉大櫨の「崇祀郷賢」が実現しなかったのは、桐城三祖内での地位が反映された可能性があるのである。

その後も、彼らの活動は着実に成果をあげていった。『桐城耆舊傳』卷十一「方植之先生傳弟百十」によれば、光緒元年（一八七五）には、方東樹がついに郷賢として祀られており、弟子たちの活動が継続的に続けられたことを示している。方東樹師弟は、「崇祀郷賢」を通して、桐城三祖の地位向上だけでなく、その継承者として自分たちの地位向上も実現していったのである。

## おわりに

本稿では、方東樹師弟に注目し、彼らが桐城派形成に果たした役割について見てきた。彼らは活動の拠点を桐城に置き、文献整理や「崇祀鄉賢」によって、桐城三祖の地位向上をめざし、桐城人文の枠組みを提示した。その中には、戴名世の再評価など、現在の桐城派研究に貢献した成果もあった。

「歐陽生文集序」では、桐城派の各地への伝播を示したが、それは同時に、文学流派としての中心を失うことにもつながった。分派とされる陽湖派や湘鄉派が生まれたのは、桐城派拡大がもたらした結果だとも言える。その意味では、桐城古文は、一時の流行に終わる可能性があった。

一方で、桐城では、方東樹師弟が桐城人文を継承していた。今回の考察からは、弟子たちの活動が、ほぼ方東樹の主張をそのまま受け継ぎ、きわめて同一性の高い集団であったことがわかる。これは、社会的地位の低さゆえ、当時の流行への対抗意識が強かったことを反映しているのである。

その後、多くの弟子がこの世を去っても、方宗誠が中心となつて、その教えは桐城で伝えられた。後に、桐城出身の吳汝綸と馬其昶が、晩清の桐城派を担っていくが、前者は方宗誠の推薦によって曾國藩の幕客となり、後者は彼に師事している。いずれも方宗誠から強い影響を受けており、彼らが桐城派の代表となったことで、ふたたび桐城の地が、桐城派の中心と見なされるようになったのである。

一 「聞有録藁、必正之植之先生與同門厚子、鍾甫、存之三人者、而後存。歲庚戌壬子、先後兩入都。湘鄉曾侍郎、仁和邵映垣、山陽魯通甫、武陵楊性農、巴陵吳南屏、復加番正、選存若干首。」

二 「桐城古文名天下、則以方望溪、劉海峰、姚惜抱三先生、實爲海內文章之宗。承學之士、濡染日深、往往喜以文辭自見。曩者、不自揣量、與予友文鍾甫、戴存莊、馬命之以經學行義相砥勵、而又以餘力從事于辭章。以爲文者道之末、而要亦學中所有事也。」

三 「吾以爲非也。夫觀天文者、觀日月之明而不能蔑恒星、察地理者、仰泰華之高而不能劇廬霍。且方劉姚自纂作者之錄、而爲人子孫各顯其先祖之美、其義固並行、而不偏廢。余故因馬君之詩鈔、爲著一邑源流之大旨、俾來者有所攷、而又以明天下事理無方而不容以一道隘之也。」

四 「桐城山川、雄傑盤廻、深厚申於江南北。磅礴鬱積既久、遂發而爲人文。自唐宋已然矣。唐曹松著於全唐詩錄、宋李公麟見於宋史文苑傳。迨明至國朝、人文尤推極盛。康熙間、何芥須輯有龍眠古文、潘蜀藻輯有龍眠風雅、皆纂集一邑之詩文也。道光間、徐樗亭、戴存莊、復賡續以廣之曰桐舊集、曰桐城文錄。而世家巨族、又多哀錄一族之著述、以存文獻焉。如方氏之有方氏詩輯、馬氏之有馬氏詩鈔。烏呼、盛哉。是皆一邑鍾毓之秀、非徒爲一族之光顯也。」

五 「桐城之文、自植之先生後、學者多務爲窮理之學、自石甫先生後、學者多務爲經濟之學。植之先生友許玉峰、門人蘇厚子、後進張瑞階、方魯生、馬命之、皆宗主理學者。今增錄許玉峰、蘇厚子文一卷、張瑞階、方魯生、馬命之文一卷。

植之先生門人中、以戴存莊才氣爲大。其始尚才華、繼好論理論事、有關實用之文。文雖未精而有實得。惜年四十而卒矣。余編桐城文錄、義例多與存莊手訂。今錄存莊文二卷終焉。」

六 桐城の地域文化と桐城派との関係については、吳孟復『桐城文派述論』（安徽教育出版社、二〇〇一年）第二章、程根榮「桐城派形成原因六說」（安徽大學桐城派研究所編『桐城派與明清學術文化』（安徽大學出版社、二〇〇八年））、曾光光『桐城派與晚清文化』第一章（黃山書社、二〇一一年）、李波、王學剛「論晚明桐城文化對桐城派的影響」（『文藝評論』二〇一

四年八期（黒龍江省文學藝術會聯合會、二〇一四年）所収）などで論じられている。

七 乾隆五十五年（一七九〇）に浙江巡撫が『戴田有時文』を禁書名目に録入したのが最後である。また、道光七年（一八二七）に『才遺録』の重刻がおこなわれている。

八 方東樹は「先生 吾が郷の宋潛虚、方望溪先生と交はること最も契ふ（先生與吾郷宋潛虚、方望溪先生交最契。）」（『攷槃集文録』卷三「朱字録先生文集序」といい、戴名世と方苞、朱書の交遊に触れている。姚瑩は、前出の『康輜紀行』卷八で、桐城における古文の代表として、方苞とともに「戴潛夫先生名世」の名を挙げてゐる。

九 「望溪同時友戴潛虚先生、文頗得司馬子長、歐陽永叔之生氣逸韻、其空靈超妙往往出人意表。惟蘊蓄淵懿、沈深高潔遜三家、而憤時疾俗之作、尤多用、此不逮古作者。先生又以文字得禍、未能深用力如望溪、而名亦遂湮沒矣。今埴録潛虚文六卷。」

十 「國朝作者聞出、海内翕然推爲正宗、莫如吾郷望溪方氏。而方氏生平極所嘆服者則惟先生。先生與望溪生爲同里、又自少志意相得、迨老不衰。其學力之淺深、文章之得失、知之深而信之篤者、莫如望溪。望溪推之、學者其復何說也。」

十一 「郷評既協、儒林冠冕、有合祀典、無愆禮制。爲此公籲、申詳題請郷賢、以彰學行。庶幾仰叨崇祀、俾芳烈奮於無窮、渥荷褒嘉、自俎豆榮於奕世。相應備其事冊、並郷族甘結、呈送查核、詳請施行。」

十二 「望溪學行、篤實純粹、惜抱生當乾嘉、海内攷證家方盛、出奴入主、漂程焚朱、悖害道義。先生獨卓識不爲所惑、折衷論斷、一歸和平。數先生者、名在當時、功垂奕禩、是急宜奉以崇祀也。」

十三 「宗誠遍檢故籍、實無可稽、惟考國家舊制、請祀郷賢與祀名宦不同。名宦必臚舉政蹟、實有功德於民、郷賢則凡有德行學問、足爲一郷之表率者、皆可請祀於郷。不必定有功德利益於郷而後可請祀也。如桐城方百川先生名

舟、寄籍上元慶貢生、年三十七而卒。寒儒何功德於郷。惟以文行高邁、天下宗仰、遂於沒後、入祀郷賢祠。其弟望溪先生名苞、少爲桐城諸生、後官京師、老居金陵、未曾居桐城一日、其無功德、在桐可知。亦惟以經學文章師法一世、居官又爲名臣、遂於咸豐元年、請祀桐城郷賢祠。其他、如宿松朱字録太史名書、桐城姚薑塢太史名範、姚惜抱郎中名鼐、皆非有功德於郷、止以博學高文品行端潔爲後生典型。」